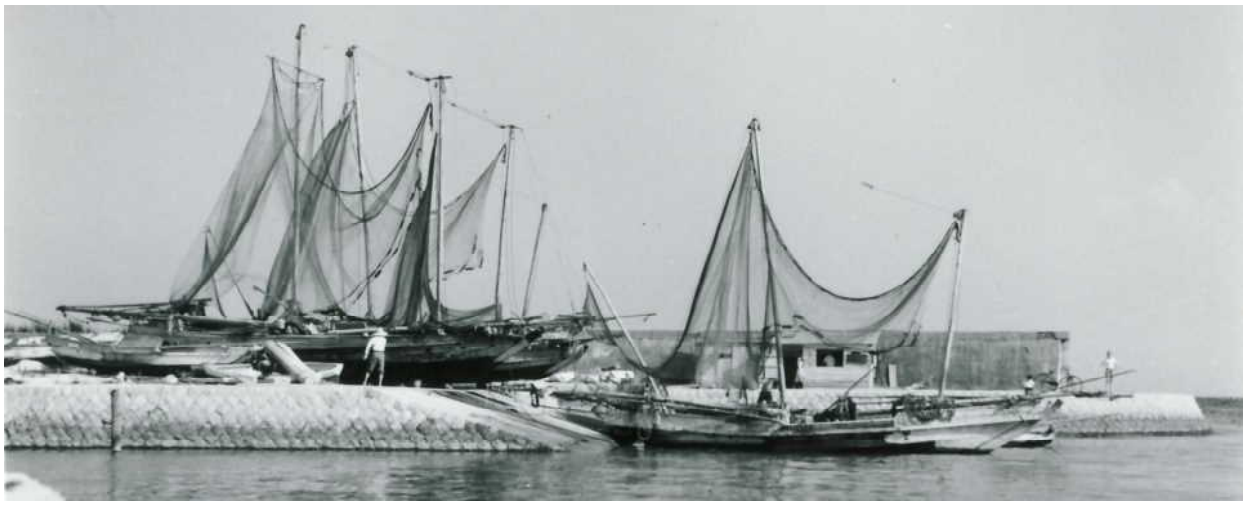
東灘高生が選んだ

# よみがえる

# 「深江音頭」の風景



打瀬船の手入れ（詳細は３頁参照）

「深江音頭」が75年ぶりに復活しました。当時「深江音頭」を歌って踊ったお年寄りの歌声を東灘高校吹奏楽部が採譜し、新たに振付を創りました。2021年10月６日の同高体育祭で披露。これに併せて、「深江音頭」に歌い込まれた風景の古写真を、東灘高生が選び展示します。

【日時】2021年９月26日（日）
～2022年３月27日（日）
土日のみ10時から17時（最終入館16:30）
【場所】神戸深江生活文化史料館
東灘区深江本町3-5-7　☎453-4980
【入館料】無料
【主催】
深江南ふれあいのまちづくり協議会
兵庫県立東灘高等学校
神戸深江生活文化史料館
【後援】
東灘区役所
神戸新聞社

戦前の踊松（詳細は２頁参照）

東灘高生が選んだ

# よみがえる「深江音頭」の風景

## はじめに

「深江音頭」が75年ぶりに深江のまちに復活しました。当時「深江音頭」を歌って踊ったお年寄りの歌声を東灘高校吹奏楽部が採譜し、新たに踊りを振り付けました。2021年10月6日の同高体育祭で披露。これに併せて、「深江音頭」に歌いこまれた風景の古写真を、東灘高校生が選び、神戸深江生活文化史料館で展示することになりました。

## 戦災復興を願って作られた「深江音頭」

「深江音頭」ができたのは1946年（昭和21）5月です。終戦直後で深江にはまだ戦災の傷跡も生々しく残っていました。音頭創作のねらいは、空襲で焼けた深江の町と傷心の人々を慰め勇気づけることにありました。深江が復活し元気を取り戻すことを願って「深江音頭」が構想されたのです。村会議員を務めた黒田清一氏の作詞、村役場職員の細野寛一氏の作曲で、曲に併せて踊りも作られました。歌詞は6番まであり、深江に伝わる名所、風情を象徴的な言葉に託しています。

発表は、1946年5月20日、大日霊女神社の例大祭の日。両氏のご夫人による三味線、振付で、社務所で披露されました。祭りに欠かせないだんじりは空襲で焼失していましたが、だんじりが保管されていたその境内で、人々は「深江音頭」の歌と踊りから笑顔と町の復興への勇気をもらったのです。その後、地元の女性たち、太鼓の名手などの協力の下、1946年8月の盆踊りでも、「深江音頭」が歌われました。大日霊女神社の境内で、太鼓の音に合わせて人々は輪になって踊りました。

しかし、歌も踊りも発表から3年ほどで歌われなくなりました。理由についてはさまざまな話が伝わっていますが、1950年に深江を含む本庄村と神戸市とが合併したことが原因、というのがなんとなく合点のいく話です。合併によって村から市になったから、いまさら深江や深江音頭というのはいかがなものか、ということです。なお「深江音頭」と共に同じ作詞作曲者によって、「深江小唄」「深江囃」「深江節」も創作され、歌詞のみが伝わっています。

## 「深江音頭」復活プロジェクトスタート

「深江音頭」の復活のきっかけになったのは、阪神深江駅が電車軌道の高架化とともに新装されたことにありました。2020年（令和2）12月、阪神深江駅を所管する澤昌弘御影駅管区駅長が、地域貢献に熱心な兵庫県立東灘高等学校

戦前の踊松。今の神戸大学の前にあり、江戸時代以前からの街道沿いの名所で『摂津名所図会』に掲載された。松の下にあるのは金毘羅宮。伝承を書いた看板も立てられていた。

（徳山学校長）に「駅構内で流す音楽を地元深江の東灘高校で作れないか」と持ち掛けたことに始まります。東灘高校では深江ゆかりの音楽を求めて、地域の歴史研究会「深江塾」の森口健一に相談、忘れられた「深江音頭」を利用したらどうか、ということになりました。

しかし、「深江音頭」の歌も踊りも、歴史のかなたに忘れられて70年。歌詞は神戸深江生活文化史料館の機関誌『生活文化史』第39号（2011年）に記載されていますが、実際に歌える人が果たしてご存命でしょうか。不安でしたが深江に古くから住んでいる女性に打診すると、「何とか歌える」という返事があり、さらに老人ホームに入居している100歳の女性もすぐに歌い始めました。

こうして2021年3月末、①「深江音頭」を歌える人が高校で録音し、高校の吹奏楽部が採譜して曲を演奏、録音する。②振付は記憶に残っていないことから、地元の踊りの師匠藤間祥寿師に、録音した音と歌詞から振付の創作をお願いする。③音頭の体裁が整えば阪神電車に伝え、東灘高校の体育祭でお披露目の演奏と演舞を行う―という案が東灘高校と深江塾の間でまとまり、「深江音頭」復活プロジェクトがスタートすることになりました。

## 深江まちおこし活動へ

この「深江音頭」復活を、地域全体を巻き込んだ深江まちおこし活動に広げようと、東灘高校、深江浜町所在の企業、深江南ふれあいのまちづくり協議会の3者で「深江音頭復活プロジェクトチーム」を立ち上げ、必要に応じ阪神電鉄・深江駅も参加することになりました。

深江駅では8月1日から2カ月間にわたり、午前10時～午前11時、「深江音頭」を駅構内で放送しました。

さらにこのプロジェクトの情報発信基地として神戸深江生活文化史料館を活用することを大利清隆深江南ふれあいのまちづくり協議会副委員長が発案。史料館は企画展「よみがえる『深江音頭』の風景」を提案し、「深江音頭」に歌いこまれた風景を写した懐かしい写真を展示することになりました。展示写真は、東灘高校生が地域の歴史を学び、史料館がこれまで収集したものの中から「深江音頭」の歌詞に合う写真を選びました。東灘高校生は写真説明の原案も作成し、パネル作製にも参加しました。歴史を学んで手作りで作製した写真パネルは、史料館での展示に先立って、9月13日から校内で先行展示を行いました。

1954年の本庄港。船底にフジツボなどが張り付き虫に食われるため、月に１度、夏場は月２～３回、陸にあげて手入れした。カキトリと呼ばれるクマデで船底の貝を取った。

プロジェクトチームとしては「深江のまちおこし、伝統の復活・伝承」を目的とした地域あげての事業として、ご理解いただきたいと願っています。

なお資金の面では深江南ふれあいのまちづくり協議会や地元企業からご協力を得ました。また東灘区役所、神戸新聞社から事業への後援もいただきました。改めて感謝申し上げます。

2021年9月

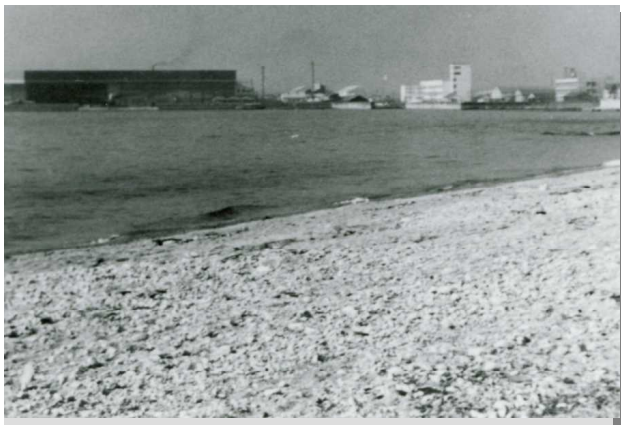
文責　深江塾・森口健一
（深江音頭復活プロジェクトチーム）

## 深江の自然海岸

東灘高校などがある深江浜町は、須磨区から運ばれた土で埋め立てによって1969年（昭和44）に生まれた。それまでは、白砂清松の砂浜が広がり海水浴なども行われた。砂防堤では釣りを楽しむ姿が見られた。砂浜はなくなったが、防波堤は深江南町の南端にかろうじて残っている。海浜には洋館や防空壕などがあった。

埋め立て前の深江南町の砂防堤で魚釣りを楽しむ人々。遠くに神戸商船大学（現神戸大学）と新明和工業甲南製作所が見える。前身は川西航空機で海軍航空機を製造していた。

1955年５月の深江南町４丁目の防波堤外側の砂浜。防波堤は1952年に作られた。右手に小さく見えるのは、頑丈な旧日本軍の防空壕で、遠くには洋館だった辺見邸が見える。



埋め立て前の第一加工所（深江南町２丁目）の浜から見た西方面の海岸。海水浴や漁業に適した白砂が広がっていた。神戸商船大学・新明和工業甲南製作所が遠くに見える。

1962年頃の深江南町１丁目付近から東方面の海岸。江戸時代以前から深江は漁業で栄え、芦屋と漁場争論も起きた。1964年～70年に埋め立てられ、72年に漁業組合も解散した。

## 深江の漁業

深江は江戸時代以前から有数の漁村で、船乗りたちは豊臣秀吉の朝鮮出兵にも従軍した。漁法もいろいろで、浜辺で網を引く地引網漁、帆に風を受けその力で船に掛けた袋状の網を引く打瀬網漁など大規模な漁や、小規模な定置網漁、ハエナワ漁、イカ釣り漁などがあった。イワシ漁が有名で、加工場でかまゆでにして、道ばたなどで干す作業も行われた。

1955年ごろ深江浜でのイワシ水揚げ風景。船はエンジン付きで「ポン、ポン」と聞こえ、ポンポン船と呼ばれた。網の両端を２艘の船で引く船引網漁という漁法が用いられた。

水揚げされたイワシを、カゴに入れ計量する1955年ごろの風景。史料館１階に、使われた台ばかり、また２階に漁業の様子を復元した模型や、カゴ、大漁旗などを展示している。

1964年当時の第一加工場（現深江南町２丁目）。ほかに加工場が２つあった。背後は銀行の寮。打瀬網漁、船引網漁や地引網漁で水揚げされたイワシは、セイロに並べられ、加工場で塩ゆでにされた。

塩ゆでされたイワシはイリコと呼ばれ天日干しされた。工場付近の砂浜や堤防の上、道路にセイロのまま並べられた。秋口のイリコは最高級品で皇室に献上されたこともあった。

## 深江の農業と工業

江戸時代から明治時代初期にかけての深江は、酒造業や漁業に次いで、農業も盛んで米麦のほか綿花の栽培が盛んだった。しかし綿花は輸入品に押されてまもなく衰退した。1920～30年代になると、大阪や神戸の都市化が進み、蔬菜や園芸作物の栽培が急増した。

このころ工場の進出が相次ぎ、はじめは清酒・製麺など食品工場やメリヤスなど繊維工場が出来た。1912年にはタイヤ製造のゴム工場が出来たという。1930年代後半には航空機部品の製造を中心とした金属機械部品工場が続々と造られ、1941年（昭和16）に川西航空機甲南製作所（現新明和工業）が設置された。

1938年11月、葉野菜を収穫する男性。阪神電車深江駅より北側や芦屋との境界は民家もなく畑が広がっていた。このころ相次いだ台風や水害で多くの農地が土砂で埋まった。

1945年に空襲被害を受けた川西航空機（現新明和工業）。手前には焼夷弾によって、黒く焦げた松の木が横たわる。軍用機の組み立てをしていため空襲の標的になったという。

深江音頭

作詞　黒田清一
作曲　細野寛一

1

深江よいとこ　潮風受けて
ヨイヨイ
今日も出船か　勢ぞろひ
沖にや網船　ポンポ船
大漁大漁で戻り船
アリヤサットサット　戻り船
深江よいとこ　そよ風受けて
ヨイヨイ
六甲降りれば　復興町
軒並みそろへて　大繁昌
栄え栄えて　明けて行く
アリヤサットサット　明けて行く
深江よいとこ　六甲のおろし
ヨイヨイ

3

高い高橋　踊り松
卯の花祭の　お神輿を
浜の戎さんが　手で招く
アリヤサットサット　手で招く
深江よいとこ　ちぬの海
ヨイヨイ
恋の散歩も　白浜ふんで
沖のかもめや　浜千鳥
甘いささやき　波の上
アリヤサットサット　波の上
深江よいとこ　朝日を受けて
ヨイヨイ

5

今日も工場で　槌の音
稲も豊作　黄金波
皆んな笑顔で暮れて行く
アリヤサットサット　暮れて行く
深江よいとこ　復興は進む
ヨイヨイ
踊り踊れば　彼（あ）の娘は唄う
歌え踊れや　朗らかに
手並みそろえて深江音頭
アリヤサットサット　深江音頭

## 深江の戦災

第二次世界大戦末期の1945年（昭和20）になると、深江地域にもアメリカ軍のＢ29爆撃による空襲被害が相次いだ。現在の東灘区に当たる御影町・魚崎町・本山村・住吉村と、深江が属した本庄村の死者は1188人、負傷者1582人、このうち本庄村は死者436人を数え、被害が突出していた。神戸商船大学（現神戸大学）もほとんどの施設が全壊したと記録されている。

空襲を逃れるため本庄国民学校（現小学校）でも1945年、児童は親元を離れ男女別々に集団疎開した。写真は神崎郡（現神河町）の寺院に疎開した女児で、硬く険しい表情が読み取れる。

1945年、空襲を受けたあとの阪神電車北側付近。中央の池のように見えるのは爆弾でえぐられた跡。深江の空襲は５月11日の被害が大きく、６月５日、８月６日と繰り返された。

空襲を受けた本庄国民学校。ガラスが飛び焼けただれている。児童の右にある白い建物は1937年に建立された、奉安殿という建物。天皇の写真や戦前の教育理念を書いた教育勅語が収められていた。

1945年の空襲で焼け野原になった本庄国民学校の西側付近。校歌にも歌われた校舎屋上のシンボル、五輪の塔は焼け残った。しかし1995年の阪神・淡路大震災で校舎は全壊、五輪の塔は再建された。

## 深江の神社と祭礼

江戸時代まで、深江など本庄９カ村（東灘区東部から芦屋市西部）は、森の稲荷神社と保久良神社の両方を惣氏神として祀っていたが、1872年（明治５）に森・青木とともに深江は稲荷神社だけを氏神とすることになった。一方大日霊女神社は、戦国時代、深江に薬王寺という寺があり、その本尊の大日如来を祀ったものとされる。名所地・踊松はかつて森の稲荷神社の祭礼で神輿が渡御するお旅所で、稲荷神社の祭神が流れついた地との伝承がある。

1908年に南西から撮影した大日霊女神社。西側は田んぼが広がり、稲荷筋の道路はあぜ道程度だった。境内には松が生い茂り、社殿の前に森の稲荷神社から渡御した神輿を置く台があった。

戦後間もないころの神輿渡御。漁師たちには神輿を海につけると豊漁になると信じられていた。しかし神輿を海水に漬けると修理費がかさみ、世話人と若い衆が対立したという。

昭和（1926～89）初期の森の稲荷神社の例大祭で、大日霊女神社に向かって、阪神深江駅北付近を練る神輿。神輿の後ろにはだんじりが続いている。深江のだんじりは空襲で焼失したが、1996年復興した。

昭和（1926～89）初期の森の稲荷神社の例大祭の神輿渡御。稲荷筋の飯田歯科（現イイダビル）前附近。馬や人力車に乗った神職らが先導した。当時本宮は５月20日、氏子は提灯を掲げて祝った。